

# 「花の塔婆」

くらもち ひろゆき

## 登場人物

老婆 この邸の主である老いた小町

先生 小町の治療にやってくる整体師 深草

うたえ この邸の女中らしい

若き小町 若く高慢だった頃の小町

小吉 深草の車夫

後見 女一名 男一名

劇場の片隅、上手寄りに能舞台とほぼ同じくらしいの大きさの舞台がしつらえてある。舞台奥から下手に向かって、橋掛かりを思わせる廊下が延びていて、客席側には、花道のような通路がある。

舞台の真ん中にせんべい布団が敷いてあり、背を向けてなにやら小さい人影がその中にある。枕元には小さな鏡台があり、そこに横たわっているのが女性であることを暗示している。鏡台の傍らには、能面のような女性の面が置いてある。

彼女は起きているのか、眠っているのか、時折、夜の鳥の鳴き声が鋭く聞こえてくる。

すたすたと廊下を歩く軽い足音がして、女がやってきた。エプロンをしている。女中だろうか？ 一見ただけでは正体が知れない。

うたえ あらま、いつの間に・・・。

女は、うたえという。布団に横たわっている老婆の世話をしているのだ。

去るうたえ。

布団から一つ呻き声が聞こえる。

間。

下手より後見の男女出てきて、上手側に女が、下手側に男が座る。

突然、この空間に似つかわしくない程のどたどたとした足音が、廊下を踏み鳴らし近付いてくる。うたえだが・・・よく見ても若いのか年をとっているのかわからない。

廊下にしばし佇み、布団を眺めながら。

うたえ よく寝るわねえ・・・ふうーっ、健康な証拠だわ。あたしだってそんなに寝てられないのに羨ましい、ほんとは寝たいのに。最初は一人で十分にぐっすりといやになるほど寝たあとそれからハムフフ・・・。

うたえ、廊下に座り込み。

うたえ まあ、仕事もしてないからあれでしょうけど、あと、まあ、

家事もねえ。お茶くらい入れてみる？ なに茶？ コーヒー？ 紅茶？ ルイボステイ？ ルイボスってなにかしらねえ？ あっはっは、ルイボス、何語かしらルイボス、あっはっは、あらあつはなにながおかしいのかしら？ 起きた？ ……あらまあ。・…もうすぐ、いらつしやいますよ。

なにやら布団がぴくりと動いたような気がする。

今度は足音を忍ばせて立ち上がるうたえ。

軽い足音をさせて遠ざかって行く。しかし、遠ざかっていったのは足音だけで、実はまだ廊下にいるのだった。そおつと戻ってくると、意地の悪い笑顔で布団を見下ろしている。

うたえ けっ、つまんないの。

遠くから、まるでクリスマスにサンタクロースがトナカイに乗ってやって来るような鈴の音がする。

「シャンシャンシャンシャンシャンシャンシャン」

うたえ あ、来た。

うたえ 足早に去る。

鈴の音が次第に近付いてくると、布団がもぞもぞと動き始める。

布団から手が出る。探った手が面を引き寄せる。面をつける。鏡台を引き寄せる。布団をかぶったまま、身支度をしているようだ。

鈴の音とともに、客席に延びた通路から、整体師の先生がやって来る。舞台のすぐ側まで来ると、体操を始める。

布団からもぞもぞと這い出して、掛け布団の上に座る老婆。

鈴の音に合わせるかのように、布団の上で振り返り、客席を向く。面を着けた彼女は、いくぶん首をかしげており、鈴の音に合わせて顔が徐々に上を向いていく。

平泉町毛越寺延年の舞「老女」の型を上半身と首のみで舞う。

うたえが戻ってくる。エプロンを外し、趣味の悪い大ぶりのアクセサリーをじゃらじゃらとぶら下げている。口紅も幾分濃いめだ。

うたえ こまちちゃん！ あらあらまあまあまあまあ、なにやっ  
てんの！ ちゃんと起きたんならそんなお面なんか付けてる場合  
じゃないでしょ。

老婆 わたし、きれい？

うたえ え？ あ、はい、きれいきれいすんごくきれいだからね、  
大人しく座っててね、怪我すると大変だから、骨折れちゃうと治  
らないしね。すぐボケちゃうからね。

老婆 面白くないわね。

うたえ 面白くないのはね、面白がらないせいなの。

老婆 あんたの冗談は面白くないのよ

うたえ 冗談じゃないのよ、冗談じゃ。

老婆 本気かい？

うたえ だってあたしはいつだって本気なのよ、本気じゃないとき  
以外は。

老婆 面白くないわね。

外では、いまだに鈴の音が規則正しく響いていたが、「し  
やらしやらしやらしやら」と、鳴り始めた。

うたえ あらそうだわこんなことしてる場合じゃないのよね、あら  
あらあらあら、まあまあまあまあ。

と言いながら、廊下の戸を開ける。

うたえ からからから。

外には体操をしている先生の姿。

うたえ あら先生、お待たせしましたホントにもう。

先生 いや、どうも。

うたえ こんにちは。

先生 こんにちはわですね。

うたえ あらやだ、先生が来るとまるで昼間みたいに明るくなっ  
ちやつて、ねえ（老婆を振り返ってから）・・・こんにちはわ。

老婆 （同時に）おはようございます。

うたえ 本当にいつまでもぐずぐず閉めたままでお待たせしちゃっ  
て。あらなにやってるんですか先生？

先生 いや、ちよっと整理体操を。

うたえ あらやだ整理体操だなんて、ねえ（老婆に）

老婆 センセ、あたし、きれい？  
先生 え？ あ、うん、そうですね、いつも。  
老婆 ありがとう。

老婆、面を外す。

老婆 これでも？

先生 あ、今日は顔色良いじゃないですか。

老婆 顔色だけ？

先生 え？ あ、はい……。

うたえ (同時に) 図々しいわよ！

老婆 うるさいわね！

うたえ まっ！

老婆 いいのよ、言っても、大丈夫、死んだりしないから。

先生 ……きれい、ですよ。

老婆 ありがとう……今日のプレゼントはなあに？

うたえ またそんな……。

先生 つまんないものですけど、まあ、この、鈴です。

老婆 あら嬉しい。

先生 いやいや。

先生、鈴をうたえに渡す。

うたえ 道理で。あたしはサンタクロースでも来たんじゃないかって思っちゃったの。

先生 サンタクロースですか。

うたえ まあ、似たようなもんだわね、白いお髭は生えてないけど。さあどうぞどうぞ。

と言いながら、うたえは、先生の腕を取って上がらせる。

老婆 お茶は、まだかね。

うたえ、キッと老婆を睨む。  
睨んだ後、無言で鈴を渡す。

老婆 お茶、飲みたいねえ。

うたえ センセ、お茶、なにがいいですか？

先生 そんな、いいですよ、いい加減。

うたえ ええっ？ (泣きそう)

先生 あ、いや、あの、何でも。  
うたえ ルイボスでも？  
先生 マテ茶でも、うこん茶でも、ゲンノシヨウコでも。  
うたえ ああーよかった。じゃあ、紅茶にしますね。  
老婆 紅茶？  
うたえ アールグレイ？ ダージリン？ オレンジペコ？ ちよつ  
とちよおつと待ってて下さいね。

ポケットからハンカチを取り出し、ひらひらさせながら廊下を去るうたえ。

老婆 あれで、いれてくるのはほうじ茶だね。色がついてりやみんな紅茶なんだから、あれは・・・。  
先生 好きですよ、ほうじ茶。  
老婆 あらそう。  
先生 どうか？ 今日、調子は？  
老婆 ・・。

老婆、先生からもらった鈴を投げる。  
チリチリと音がして、鈴が転がる。  
目で追う二人。

老婆 ・・拾って・・・。  
先生 あ、はい・・・。

先生は、鈴を拾って手渡そうとする。  
受け取るうとして手を握る老婆。そして手を握ったまま。

老婆 先生。先生あたしね、先生からもらったものは、どんなにっまらないものでも大事にしてるの。  
先生 ああ、それは、どうも。  
老婆 そう、鼻をかんだちり紙でも、ね。  
先生 そんなものあげてないでしょ。  
老婆 だから、そのくらいつまらないものでも大事にするの。  
先生 そんなにつまんないものばかりあげたかな？  
老婆 だから、例えよ、例え。  
先生 ああ、まあ、じゃあ。  
老婆 なぜだかわかる？  
先生 いや、あの・・・。  
老婆 先生が大事だからよ。

先生 あ、いや、どうも、じゃあぼくも大事にしなくちゃ、ね・  
・今日は、どこからいきましようかね。

老婆 先生。

先生 はい。

老婆 あたし、モテたのよ。

先生 そりゃそうでしょう、ずいぶんと泣かしたんじゃないですか？ うぶな男を、ぼくみたいなの。

老婆 わかる？

先生 わかりますよ。

老婆 先生って・・・素敵な方ね。

先生 ほらそうやってぼろっと褒める。これはなかなかできないんですよ。

老婆 モテたの、あたし。

先生 そうでしょうねえ。

老婆 そうなの・・・。

先生 ・・・あの・・・手・・・。

老婆 この手はね、いろんなものをもらってきたの。お米から砂糖、ワンピースにハイヒール、指輪に宝石、果ては、現金から株券なんてのもあったわね。もらわなかったのは人の命と、石鹸くらい。でも、みんなこの指の間からこぼれ落ちてしまったわ。まるで砂漠の砂みたい、サラサラサラサラ、一時も止まらなかった・・・。ねえ先生？

先生 はい？

老婆 先生はこの指の間からこぼれ落ちる？

先生 そんなに小さくないでしょ。

老婆 手に余るものは、残るのよねえ。

先生 はあ・・・うん、圧力鍋、とかね。

老婆 あの人も、行ってしまった。

先生 あの人？

老婆 九十九日通ったあの人。

先生 ・・・なんで？

老婆 あたし、モテたのよ・・・。

先生 ああ・・・はいはい・・・。

老婆 こんな手に余るものを残して・・・。

先生 ああ・・・この、邸の人ですか？

老婆 不動産はね、最後の砦よ。でも、固定資産税は高いわよ。

先生 固定資産税ね・・・払ってみたいもんですな。

老婆 ・・・・払わせてあげましょうか？

先生 ・・・・いえいえいえ。

先生、慌てて老婆の手を離す。  
すると、鈴が落ちる。「ちりりん」

先生 あ……。  
老婆 ……拾って……。  
先生 すいません。

先生、鈴を拾って、今度は手渡さないで側に置く。

老婆 今度は手渡して下さらないの？  
先生 じゃあまず、今日は手からいきましようか。

老婆、側の鈴を取って廊下の方に投げる。「ちりりん」

老婆 ……拾って……。

先生 今度から、もつと重いものにしますよ。

老婆 硯とか？

先生 茶釜とか。

老婆 火鉢とか。

先生 墓石とか。

老婆 五右衛門風呂とか。

先生 五右衛門風呂はちよつと……。

老婆 墓石だつてちよつと……。

先生 あ、ごめんなさい。そういうつもりじゃ……。

老婆 そういうつもりって？

先生 いや、あの、その……重いものってことで。

老婆 先生、お墓建ててくださるの？

先生 いや……そんな縁起でもない。

老婆 あたし、生きてる時の家も死んでからの家もみんな誰かから  
もらうんだわ。

先生 碁盤とか。

老婆 へ？

先生 将棋盤とか……。

老婆 九×九〇八十一ます、百日通つたら、死にますよ。

間。

息を呑む二人。妙な緊張感が漲る。

するとそこへお茶道具を携えたうたえが再登場。

廊下に転がった鈴を蹴飛ばす。

「ちりりん」



うたえ あら、まあ、何でこんな所に鈴が？ だめじゃないのこんな所にほっぼらかしといちゃ、ごめんなさいね先生、でも悪気があるわけじゃなくて、性根が腐ってるからこの女。

先生 はあ……。

老婆 拾って……。

先生、鈴を拾う。そしてポケットにしまう。

うたえ 今日はね先生。インスタントコーヒーにしましただって先生気を遣われるのがおいやなものでどうですか？ インスタントコーヒーだと、なんか、全然気を遣われてる感じがしないでしょ、でもそんなこと宣伝しなくてもいいようなものだけど言ってしまうのわたしは。だからね、カップだけ持ってきて、ポットを持ってきました。二杯目以降はセルフサービスですよ。ほうら全然気を遣ってないでしょう。

先生 はあ。

老婆 ……あんた、バカでしょ。

うたえ ……全然腹立たしくないわ。だってほら、一寸の虫にも五分の魂って言うじゃない。

うたえ、コーヒーをいれ始める。

老婆 先生……鈴を……。

先生 ……もう、投げない？

老婆 さあ、それはどうかしらね。

うたえ それじゃダメじゃないの、せつかく先生がくれたんだから大事にしなくちゃ。

老婆 いいの。

うたえ いいのって……。

老婆 いいの、あたしは……。

先生 いや、まあ、ぼくは……。

突然、廊下の戸を叩く音がする。

小吉 ごんごん、ごんごんごん。

ガラスの戸を叩く音がする。

振り向くうたえと老婆。

うたえ、戸に近付き、戸を開ける。

うたえ からからから。

するとそこにいたのは気違いの小吉だった。

うたえ なんだいお前。

小吉 あんたじゃなくてその小町に用があるんだ俺は、俺は小町に、春は、花の咲く陽気だから、これを持ってきた。赤い花だ、赤い、花はいいよなあ。花は。

うたえ はいはいどうも、んじゃ。

小吉はその辺の雑草の花を適当に摘んできたようだが、その花は赤くない。

花を受け取って、戸を閉めようとするうたえ。  
戸を押さえる小吉。

うたえ こらっ、何するの、だめだつてば。

小吉 花はお墓に供えられてるから花咲いてるところはお墓なんだよ。よな。

うたえ はいはい。からから、ぴしゃっ。

戸を閉める。と、花をゴミ箱に捨てる女。

うたえ 小吉、今日も飛ばしてるわねえ。

老婆 庭の掃除でもすりゃいいのに。

うたえ まったくだわ、どんなバカでもほうき持たせりや掃除くらいするでしょうよ。でもあれはもうほうき持たせたら頭の上に立てるからね。

先生 立てる？

うたえ 頭の上。

先生 電波かあ。

うたえ 竹に電波来るの？

先生 うーん、来るかも知れないけど、わかんないね、来ても。

老婆 何ならわかるのかしら？

先生 まあ、金属でしょうね。

老婆 その、鈴には来るかしら？

うたえ 何バカなことをあ、お茶入れなきや、コーヒーだけどしかもインスタントねえ。

と、コーヒーのふたを開けようとする。

いつの間にかコーヒーが入っている。どうやら先生がお湯を入れたようだ。

老婆 入ってるよ。

うたえ え？ あらやだもうあたしったらお茶目。

老婆 自分で言うんじゃないよ、あんたホントにバカだね。

うたえ バカバカ言わないでよ、あたしバカみたいじゃないの。

老婆 バカをバカと言ってどこが悪いんだい。

先生 まあまあ。

うたえ (ぶつぶつぶつ)

老婆 先生にコーヒー入れさせといて。

うたえ センセ、お砂糖いくつでしたっけ？

先生 いや、何も・・・。

老婆 あたしやコーヒーは飲まないよ。

うたえ あたしいじめられてる、いじめられてる？ いじめられてるのよ、ああかわいそうだわ。

先生 まず、やっちゃいますか？

老婆 まあ、コーヒーでも飲んで。

先生 でも・・・。

うたえはまだぶつぶつ言っている。

老婆 なにぐずぐず言ってるんだい。

うたえ だって、だって。

老婆 だってじゃないよ！

再び廊下の戸を叩く音がする。

小吉 ごんごんごんごんごんごんごん・・・。

うたえ また、あのバカ。

うたえ立ち上がったって戸を開ける。

うたえ がらり。

小吉 お前じゃないって言ってるのに！

うたえ まあ！

老婆 はいはい、なんだい？

老婆、ついに廊下に立つ。

うたえ、戻ってきて、老婆の布団に潜り込んでしまう。

小吉 あの、あの、あのあのの・・・お詫びに石鹼持ってきた。  
お詫びに石鹼持ってきました。

老婆 石鹼？

小吉 あわあわあわ、泡が立つ奴だ。

老婆 石鹼ねえ、あたしは他の何をもらっても石鹼だけはもらわな  
いんだよ。

小吉 これ、石鹼という名のケーキだ。ホネケーキだ。

老婆 あたしを殺す気かい？

小吉 お詫び・・・。

老婆 バカ。

小吉 ごめんなさい。

老婆 謝らなくていいよ。

小吉 ごめんなさい。

老婆 謝らなくていいって言ってるのに。

小吉 お詫び・・・。

老婆 お黙り！

小吉 もんもんもんもん。

老婆 石鹼はねえ、いやなんだよ。

小吉 もんもんもんもん・・・。

老婆 それ持って早くお帰り！

老婆 足早に去る。

先生 あ、ちよつと・・・。

先生、老婆を追う。

残る小吉。

小吉 もんもんもんもん・・・。

小吉、去ろうとする。

去りかけると、呼び止められる。

去りかける小吉を呼び止め、やってきたのは若き日の小町  
である。

舞台の下、庭とおぼしきあたりに対峙する二人。

部屋では後見の男女が、残されたコーヒの道具と小さな  
鏡台を片づける。

若き小町 お待ち！

小吉 へい。

若き小町 今日も、帰ってしまうの？

小吉 へい。

若き小町 どうしてあの人は毎日帰ってしまうの？

小吉 へい、それは、旦那がそう約束したからだ。

若き小町 約束、そうね、約束ね、でも、破られるためにあるもの

じゃない？ 約束なんて・・・それとも、破るほどの価値もない

約束なのかしら。

小吉 約束は、守るためにあるものだ。

若き小町 お前は、わたしに、どんな約束をしてくれる？

小吉・・・お約束の日まで、旦那を送り届ける。

若き小町 百日も？

小吉 それがあんたのお望みだ。

若き小町 はあ？・・・そうね・・・そうだったね。

小吉 約束は、守るためにあるものだ。

若き小町 そうかしら？ この約束、今まで守ったバカなんていな

いんだよ。

小吉 旦那は、そんなのとは違うんだ。

若き小町 そうかしら？

小吉 現に今だって・・・。

若き小町 お前はどうかなの？ 百日もバカ正直に通う？ このあた

しを目の前にして・・・。

小吉 たいそうな自信だ。

若き小町 百日通えたら、お前だっていいんだよ。

小吉・・・。。。。。。。

若き小町 百日通えたらね。

小吉・・・。。。。。。。

若き小町 百日通えたら、あたしは一生お前のもの。

小吉 通えなかったら。

若き小町 通えなかったらあたしは一時お前のもの。

小吉 一時？

若き小町 あたしは百日と引き替えに一生を捨てるの。そして一時

と引き替えに一生を拾うの。

小吉 誰とでも寝るっていうのか？

若き小町 あっはっは。

小吉、若き小町のそばへ寄り、腕を握る。

しかし、その手を払いのけられる。

そこへ、深草が顔を出す。

深草は先ほどの先生だ。

深草 どうした？

小吉 いや、なんでもねえ。

若き小町 節はずれのヤブ蚊がね。

深草 ヤブ蚊？

若き小町 赤い血の匂いと白い柔肌に誘われたのかなあ。

深草 行くぞ、小吉。

若き小町 どうしても帰ってしまうの？

深草 帰らなきゃ、通えないから。

若き小町 そう・・・。

深草 うっかりこのまま泊まったら、通えなくなるだろう。

若き小町 そうね。

深草 百夜通ったら、きつとぼくのものになっておくれよ。

若き小町 そうなることを祈ってますわ。

深草 ぼくはね、一生小町を自分のものになりたいのさ。わかるかい？

一晚や二晩じゃない、一生だ。

若き小町 恐ろしい方。

深草 今まで百夜通ったものはいないだろう。

若き小町 そんな方がいらしたらあたしはこんな所にいませんわ。

深草 行くぞ、小吉。あと七十五日だ。

深草、去る。あとを追う小吉だったが、去り際に振り返ると。

小吉 本当だな・・・。

若き小町 え？

小吉去る。

若き小町 バカはバカだねえ。

部屋の方では、むっくりとうたえが起きあがる。

うたえ あらやだあたし聞いちゃった、いけないわあたしったら盗

み聞きしたみたいで、まあ、あの女、ホントに性根が腐ってるわ

ね。性根に歳は関係ないわね。あら全くふしだらなやだわあー。

若き小町 うたえ！

うたえ はい、あら聞こえたかしら。

若き小町 もう、二十五日もたったよ。

うたえ そうねえ。

若き小町 今までこんなことあった？

うたえ そうねえ、あんまり覚えてないけど、うん、なかったんじゃないの？

若き小町 あたしってさあ、魅力ないかなあ？

うたえ そんなことないと思うよお、ほらあ、今までなんか十日ともった人いなかったじゃない。

若き小町 そうだよねえ。

若き小町、廊下から部屋に上がってくる。

そして、うたえの座っている布団にばたつと倒れ込む。

若き小町 ほんとに好きだったらさあ、我慢できないよねえ。

うたえ そうかしら？ 逆じゃないの？ ほんとに好きだから我慢できるのかもよ。

若き小町 えーっ。

うたえ えーって、だってそうでしょうよ。

若き小町 それってきれい事だよ。

うたえ きれいごとでしょうよ、あんたはただ状況に流されやすいの。

若き小町 そんなことないよ。

うたえ まったく性根が悪いうえに往生際まで悪いねえ。勝手に条件つけといて自分で破つてりや世話ないね。

若き小町 だって。

うたえ だってじゃないでしょ、今までだって何人の殿方が失敗したことか。

若き小町 我慢が足りないのよ。

うたえ 我慢が足りないのはあんたも一緒でしょ、一緒どころか、輪をかけて我慢が足りないじゃないの、あんたは誰でもいいの？

相手は？

若き小町 そんなことないよ、ちゃんと選んでるよ。

うたえ そうかしら？

若き小町 選んでるって、酒井さんでしょ、桑田さんでしょ、高山さんでしょ、それから杉本さん、赤沢さん、上村さん、井原さんに小野ちゃん、幸介君に・・・。

うたえ あーもう、まったく選びすぎだわうらやましい。あたしなんか選ぼうにも選ぶ相手がいないのにまったく贅沢だわ。

若き小町 ふっ。(鼻で笑う)

うたえ あー、鼻で笑った、鼻で笑ったわこの女。

若き小町 そんなことないわよ、ふっ。(また笑う)

うたえ ほらあ、あたしのことバカにしてる、バカにしてるのね。

いくらあたしが奇妙な女だからって、バカにされるのはいやだわ、復讐してやる、いつか復讐してやる。

うたえがしやべっている間に、部屋の隅の衝立の後ろに行つて着替え始める小町。

若き小町 そういうのは陰で言うもんじゃないの？

うたえ あたしは表裏のない性格だから言ってしまうの。

若き小町 あんた、バカでしょ。

うたえ あたしつたらお茶目。

若き小町 自分で言うんじゃないの。

うたえ だったらこまちゃん言ってくれる？ お茶目って。

若き小町 あたしに復讐を誓うような女にそんなことが言える？

うたえ あらやだ、復習つてあれよ、予習の反対よ。

若き小町 面白くないわね。

うたえ 面白くないのはね、面白がらないせいなの。

若き小町 あんたの冗談は面白くないのよ。

うたえ 冗談じゃないのよ、冗談じゃ。

若き小町 本気？

うたえ あたしはいつだつて本気なのよ、本気じゃないとき以外は。

若き小町 面白くないわね。

うたえ だつてあたしはあんたを面白がらせるためにいるんじゃない

いんだもん。

若き小町 あたし、もう、寝るから。

うたえ あ、そう。

若き小町 あ、そうって、そこどいてよ。

うたえ あらあ？

若き小町 ちゃんとシワ伸ばしてつてね。

うたえ はいはい。

うたえは、布団のシーツのシワを伸ばし始める。

うたえ で、どうなの？ 深草さんは。

若き小町 どうって？

うたえ いいの？

若き小町 あたしを襲う度胸はないね。

うたえ 我慢してるんじゃないの？ 今までの人とは一味違うのよ

きつと、ほんとは溢れんばかりの欲望と闘つて、毛穴からもう汗

が染み出さんばかりなのよ、それでもじつと我慢してるのよえら

いわあ、あたしだつたらもう・・・。



若き小町　そういう感じじゃないのよねえ、なんか、そういうこと別にいいみたい。まあ、あたしでそうなんだからあんたなんて鼻もひっかけてもらえないよ。よっぽどの物好きじゃない限りね。うたえ　あたし物好きに好かれるの、マニアかもしれないわ、マニアよマニア。

若き小町　何マニア？

うたえ　あたしマニア。

若き小町　気持ち悪い。

うたえ　全然腹立たしくないわ、だってあたしはいい人ですもの。

若き小町　残念でした、深草さんはこのあたしに会いに来てるのね。

うたえ　照れてるんだわきつと、照れてるのよ。

若き小町　はやく出てつてよ、あたし寝るんだから、でも布団はちやんとしてね。

うたえ　はいはい、でも、どうするの？　このままだとあんたは一生深草さんのものよ。

若き小町　まだまだ先は長いわよ。

うたえ　なにするの？

若き小町　さあてね。

うたえ　裸で布団に入って待ったりするの？　枕元の寝間着取ってかなんか言ったりするの？

若き小町　面白いね。

うたえ　そうでしょ、面白いでしょ、やっぱりあたし面白いんだわ、面白いのよ。

若き小町　まったくうっとおしい女だね、あんたは。

うたえ　そうかしら？

若き小町　いいからいいから。

小町、着替えを終えて出てきて、うたえを部屋から追い出す。

若き小町　おやすみ。

うたえ　おやすみなさい。

うたえ、去る。

小町、布団にもぐり込む。

遠くから太鼓の音が聞こえてくる。

その音にあわせるかのように布団がもぞもぞと動き、始めに帯が小町の手から投げられ、続いて、寝間着が投げられる。

小町は布団の中で裸になって待っているのだ。

太鼓の音がピタリと止まると、外から戸を叩く音がする。

深草 こんこんこん。

若き小町 ……だあれ？

深草 こんこんこん。

若き小町 どなた？

深草 ぼくだよ。

若き小町 深草さん？

深草 こんばんわ。

若き小町 もう、今日は来てくださらないのかと思ってたの。

深草 開けるよ。

若き小町 え？

深草 入るよ。

若き小町 ダメ。

深草 どうして？

若き小町 だってあたし、もう床に入ってるんですもの。

深草 そうか……わかった、でもぼくは、今夜も通ってきたよ。

若き小町 お声だけじゃわかりませんわ。

深草 だったら入るよ。

若き小町 待って。もしお入りになるなら、それなりの覚悟をして

お入り下さい。

深草 どうして？

若き小町 入って下さったらお話します。

深草 ……じゃあ、いろいろ、まあ、覚悟して。

戸が開く。

深草 からからから。

深草 静かに入ってくる。

深草 からから、ぴしゃ。

小町は床から起きあがらない。

若き小町 どういうことかわかる？

深草 え？

若き小町 あなたは寝室に入ってきたのよ。

深草 はい。

若き小町 だったらどうするの？

深草 あの、一応、今日も来ましたけど。  
若き小町 バカ。

深草 え？

若き小町 あたし、今何してるかわかる？

深草 いや、まあ、寝てるんでしようけど。

若き小町 あたし、今、起きあがれないの。

深草 どうして？

若き小町 そのの、寝間着、取ってくださいる？

深草 え？

若き小町 寝間着。

深草 あ、はい、いやあ。

若き小町 あたし、今、裸なの。

深草 ・・えつと、これ、これですか？

深草、寝間着を取って小町に渡そうとする。  
すると、小町、深草の腕を取る。

深草 あ。

若き小町 ねえ、どうする？

深草 ・・・。

深草、慌てて手を振りほどく。

深草 ダメだ、あと、まだしばらく通わなくちゃならない。

若き小町 これは夜這いでしょ。

深草 いや、そうじゃないんだ。

若き小町 覚悟してなかったの？

深草 覚悟は、まあ、ちよつと別の。

若き小町 別ってなに？ 別って。

深草 いや、そうじゃなくて。

若き小町 ・・・出てって！

深草 いや、あの。

若き小町 出てって！ 二度と来ないで！

深草 いや、うん。

若き小町 早くあっち行ってったら！

深草 じゃ、まあ、また明日。

若き小町 バカ！ もう来ないで！

深草 でも、約束だから、百日通う約束。

若き小町 いいから早く帰ってよ！

深草 わかった、今日は帰るよ、でも、あしたも必ず来るよ。もう

七十八日目だ、こんなところでやめるわけにはいかない。

若き小町 あなた律儀な方ね。でもあなたわたしをご存じないわ。

深草 知ってるさ。誰もがあこがれ、誰もがものにしようとしてで

きなかった人。誰一人として手さえ握れなかった人。

若き小町 おバカさん。

深草 その小町にぼくは腕を握られたんだ。自信を持っていいね。

若き小町 早く帰って！

深草 わかった、帰るよ。でも、ぼくが小町のことを大切に思っ

ていることだけはわかっておくれ。いまはそれだけでいい。まだ二

十日以上あるんだから。

若き小町 ・ ・ ・ ・ ・

深草 じゃあ、行くよ、小町、おやすみ。

若き小町 ・ ・ ・ ・ ・

深草、廊下から去ろうとする。

いつの間にか小吉が控えている。

深草 小吉！ 帰るぞ。

小吉 へい。

深草、去る。ぴしやりと戸が閉められる。

深草 がらり、ぴしや。

静寂。

再びしずかに戸が開いた。

小吉 からからからから。

若き小町 誰？

答えない。

若き小町 深草さん？

小吉 本当だな？

若き小町 え？

小吉 本当なんだな？

若き小町 お前・ ・ ・ ああ、本当だよ。でも、このまま続いたら、

あたしはあの人のものだねえ。

小吉 百日通えなかったらどうするんだ？

若き小町 あたしは自由ね。自由はいいね、自由は。あの人が、百

日通えたら、あたしはこの上もなく不自由だねえ。

小吉 俺がやる。

若き小町 え？

小吉 俺がやる！

若き小町 何を？

小吉 俺が、やる……。

小吉、去る。

若き小町 バカだねえ……あーあ、恥かっちゃった……ばか・  
・あーもう、ばか、ばかばかばか。

老婆登場。廊下に立ったまま、若き小町を見つめる。

老婆 百日、通わせればいいじゃないか。

若き小町 そんなのできっこないじゃない。

老婆 できそうじゃないか。

若き小町 バカじゃないの。

老婆 バカの方が貴重だよ。バカはね、明日死ぬことなんて考えないのさ。明日が来ると無邪気に信じてるのさ。信じたからって救われるわけじゃないのにね。

若き小町 信じてても救われないね。だからあたしは信じない。

老婆 そうかしら？ でも本当は信じてたんじゃないの？

若き小町 そんなことないわ。

老婆 じゃあよっぽど運が良かったんだねえ。

若き小町 どういうこと？

老婆 あたしをごらん。

若き小町 見てるわよ。

老婆 何が見える？

若き小町 なにがって……。

老婆 お前の見え透いた将来が見えるだろう。

若き小町 何言ってるの？

老婆 いつ死んでもいいと思うようになると、枕元に着るものからいたたんでおくものさ。

若き小町 あたし、このまま死んでもいいわ。

老婆、廊下から部屋に入り、小町の枕元に座る。

老婆 ……長生きするよ。

若き小町 え？

老婆 長生きするよ、保証する。これは予言じゃない、事実だよ。  
若き小町 は？

老婆 長生きすればするほど体に気を遣うものさ、あたしだってほ  
ら、こんなに薬を持ってるよ。

老婆、手に持っていた巾着袋から薬の束を出す。

老婆 人はね、墓石の上で暮らしてるようなもんだ。ちよつと足を  
滑らせたらね。お骨がいつぱい納まつてる、暗くて深い穴にまっ  
さかさまだ。お前のその布団、まるで通夜に死人が寝ているよう  
だよ。

若き小町 気味の悪いこと言わないで。

老婆 いつまでも、若くはないってことさ。悔しかったらそこから  
立ち上がってごらんよ。

若き小町 え？

老婆 立ち上がってごらん。

若き小町 いや、あの、ちよつと……。

老婆 ほうらできやしないだろう。

若き小町 いや、これは……。

老婆 あんたはもう半分死んでるようなもんだ。でもあと半分死ぬ  
までには、五十年以上もかかるんだよ。

若き小町 立ち上がれるけど、でも、今はダメなの。

老婆 そうかね。

「ちりりん」と、鈴の音が響く。

すると、老婆は立ち上がり、去ろうとする。

老婆 後悔はしないつもりだったけど、ちよつと調子に乗りすぎた  
わ。九十八、九十九、百、九十八、九十九、百。あと一日だった  
のに。

老婆、若き小町の脱いだ寝間着と帯を持って去る。

若き小町 あ、ちよつと、それ……ちよつと待って！

遠くから「ちりりん」と鈴の音だけが響く。

若き小町 ちよつと待ってよー、うたえー！ うたえー！ うたえ  
ー！

返事はない。

若き小町 ちよおっとおー。

小町、一旦布団にもぐり込み、もぞもぞとやっている。太鼓の音が再び聞こえてくる。

そして、ちよこちよこと廊下から去って行く。

後見の女が、乱れた布団のシーツを整える。

後見の男がそれを手伝う。

そうこうしているうちに、二人の手が触れ合う。

照れる二人。

「ちりりん」と鈴の音が鳴り、慌てて持ち場に戻る後見の男女。

廊下の戸がすうっと開いて、小吉が忍び足で入ってくる。

小吉 からからからから。

誰もいない布団を見ると、そうっと近づいて、横になってみる。ひとしきり匂いを嗅ぎ、うなる。悶えながら「小町」とつぶやいて布団の上を転げ回る。

いつの間にか、うたえが側にいる。そして悶える小吉を見下ろしている。

うたえ そんなにまでねえ。

小吉 あ。

うたえ いいのいいの気にしないであたしは大丈夫だから。ねえ小吉、決心しちやっただんでしょ、決心。しようがないわね決心しちやっただから。あたしはそのことについてどうこう言うつもりもないしどうなっても知ったこっちゃないんだけど、知らんぷりはできるの知らんぷりは。だってきつと最初からそうなることになってるんですもの。だからあたしは知ーらないって。

うたえ、去りかける。

小吉 あ、あああ……。

うたえ、振り返って。

うたえ あ、そうだ、小吉、お前ね、気が狂うよ。

小吉 え？

うたえ、去る。

呆然と見送った小吉だったが、「ちりりん」と鈴の音がして、慌てて去る。

再び後見の男女が、乱れた布団のシーツを直す。そしてまた手が触れ、照れる。「ちりりん」

持ち場に戻る二人。

鈴の音を響かせながら先生が戻ってくる。

追って出てきたのはうたえだ。

うたえ センセ、センサーあちらでテイラミスでも食べてらしたらいいのに。本物のマスカルポーネと、エスプレッソですよ、それともナタデココが良かったかしら？ あらーんタピオカ？

先生 とりあえず仕事だけは済ませないと。

うたえ いいんですのよセンセ、あたしの、ほら、こんな所やこんな所、やだわあー、こんな所とかもんで下さればいいのに。

先生 怒られちゃうよ。

うたえ そうねえ、性根が腐ってて、底意地も悪い上に目ざとくて嫉妬深いからねえ。

先生 あんた言うねえ。

うたえ あらやだあたし、先生の前だとなんか、素直な女になれそう。

先生 なんなくていいよ。

うたえ ひどいわあー。

先生 俺だって努力してんだから。

うたえ 努力って何を？

先生 まあ、百円ショップのぞいたり、競馬やったりとかね。

うたえ そんなのダメよ、ダメだわ。そんなの努力じゃなくて趣味よ趣味、趣味で努力なんてダメだわ。

先生 趣味と実益を兼ねないと。もつたないでしょ。

うたえ 若い人がもつたないだなんてそんなこと言っちゃいけないわ。若い人は目的のために手段を選んじやダメだって、若いってそういうことでしょ。もうあと一押しよ、センセ。

先生 なにが？

うたえ なにがってまああなたおとぼけちゃって、この邸よ邸。

先生 え？

うたえ 欲しいんでしょ？

先生 いやあ。

うたえ この家つぶして更地にする？ それともリフォーム？



先生 何言ってるの？

うたえ 匠お呼びになる？ 匠。

先生 なんのことかさっぱりわかんないなあ。

うたえ 顔に書いてあるわよだって、始めからそれが目的なんですよ。  
もの。

先生 ちよつと声大きいよ。

うたえ 大丈夫、知ってるから。

先生 え？

うたえ 知ってるのよだから、百日、そうよ百夜通いよ、それができた暁には、晴れてこの邸はあなたのものよ、あたしもついてていい？

先生 いや、それはちよつと。

うたえ ええーっ。(泣きそう)

先生 でも、百日通ったら死ぬって……。

うたえ それはね、うふふふふ。

先生 うふふふって……。

うたえ 明日でもう百日目、お気づきになってたかしら？ うかう

かと九十九日通ってらしたのよあなたは。

先生 いつの間に。

うたえ あつという間よ。

先生 気づかなかったなあ。

うたえ 気づけよ。

先生 はい。でも、まあ作戦としては間違っていないよな。淋しい老人落とすには親切だもんなあ。この邸もらうためだったら百日くらい通うのなんて簡単だよ。養子縁組したつていいもん。

うたえ 良くもまあ、そこまで考えるものねえ。あたしには想像もできないわ、うふ。

### 老婆登場。

老婆 あたしもうすっかりくたびれちゃったわ。ごめんなさい先生、お願いします。

先生 そのために来てるんだから。さあ、横になって。

うたえ あたしにもして下さればいいのに。

先生 いやまあ、ねえ。

老婆 あんたにや贅沢よ。先生はあたしの先生なんだから。

うたえ ふん、そんなこと言ってられるのも今のうちよ。ねー先生。

先生 いや、うん、まあ。

そうこうしているうちにうつ伏せになる老婆。

軽く背中をマッサージし始める先生。

老婆 先生、先生あたしね、昔先生とそっくりな人を知ってたわ。  
先生 そっくりな人？

老婆 そう、その人はね、毎晩毎晩通ってきたの。他にそんなこと  
できた人なんていやしなかった。だってみんな、十日とたたない  
うちに泊まって行くんですもの。

先生 へえ。

老婆 言ったでしょ、あたし、モテたのよ。

先生 はいはい。

うたえ その頃はあたし、鼻で笑われたのよ、鼻で。

先生 え？

うたえ 思い出すだけでいまましいわ、いまましいったらあり  
やしない。

老婆 あたしがどんなに誘いをかけてもあたしを抱こうとはしなか  
った。

うたえ 布団の中で裸で待ってたりしたのよやらしいでしょー。

老婆 傷ついたわよ、あたしも、そんなにあたしは魅力ないのかっ  
てね。

先生 きつと真面目だったんでしょ、その人。

老婆 真面目って言うのかねえ。

先生 だってそうでしょう。

老婆 百日通って、あたしを一生自分のものにするんだって、でも、  
そうはならなかったわ。

うたえ あと一日だったのに。

老婆 あたしは、それから有り余るほどの自由を得たわ、あの人と  
引き替えに・・・あの人は、九十九日通って、逝ってしまった。  
うたえ 自分のせいよ。

老婆 先生、鈴を。

先生 え？

老婆起きあがる。

老婆 先生、鈴を下さる？

先生 あ、はい。

先生、ポケットに入っていた鈴を老婆に手渡す。すると老  
婆はその手を握る。しばし見つめ合う二人。  
握った手をすうっと離して鈴の音が鳴る。

「ちりりん」

鈴を鳴らしながら廊下の奥へ消える老婆。

「ちりりん」

「ちりりん」

「ちりりん」

「ちりりん」

「ちりりん」………

うたえ すいません深草さん、明日で百日目だというのにこまちゃ  
んたらなんか、ご機嫌ななめで、ねえ。

先生 はあ。

うたえ いよいよあと一日ですねえ。

先生 はあ。

うたえ 深草さん。

先生 はい？

うたえ 深草さん。

先生 深草さん。

うたえ そう、深草さん。

先生 深草さん。

うたえ 深草さん。

深草 あ、そうか。

うたえ あらやだあたしったらお茶も出さないで、ねえまったく気  
の利かないねえ、でも、あらやっぱりお茶なんか必要ないかしら  
もしかして、あたし邪魔してる？ 邪魔してるお邪魔かしらあつ  
はっは。あたししたら先祖代々お邪魔虫、子々孫々までもお邪魔  
虫やだわあ。

深草 まあ、何するわけでもないからね。

うたえ 何もしなくてご機嫌斜めなんじゃないかしら？

深草 いや、まあ、それは明日からもう思う存分……。

うたえ あらやだまあ深草さんたらエッチ。

深草 エッチって……。

うたえ 我慢してたの？

深草 え？ ええ、まあ。

うたえ もう毛穴から汗が染み出さんばかり？

深草 汗って……。

うたえ がまん汁きやー、やだ、言っちゃったー、でもあたしそん  
な勘違いなさらないでねやだあたししたらそんなお下品な女じゃ  
なくってよ。

深草 なんかはしゃいでますね。

うたえ だってほら、二人つきり、ねえ深草さん。

うたえ、すりすりと深草にすり寄っていく。  
それに合わせて離れていく深草。

うたえ あら？ いっこうに、距離が、縮まらない、のはなぜ？  
深草 はっはっは。

いつの間にか、布団を一周している二人。  
うたえ、一気に深草を捕まえようとする。

うたえ 深草さん！

深草 (逃げながら) 小吉！

うたえ そんな小吉だなんて、何も取って食おうってんじゃないんだからあたくしは。

小吉、外から戸を開ける。

小吉 がらがらがら、へい旦那、お呼びで。

うたえ んもう！

深草 ああ小吉、車は、どうだ？

小吉 どうだって言われても、車は車だ。

深草 調子は。

小吉 普通だ。

深草 そうか、普通か。

小吉 普通だ。

深草 そうか、ははは。

小吉 ……。

うたえ ……。

深草 はははははははははははははははははは。

うたえ 何がおかしいのかしら？

小吉 んじゃ、戻る。

うたえ ほほほ。

深草 小吉！

小吉 へい。

深草 もうちよつというろ。

小吉 へい。

「ちりりん」と鈴の音がする。

深草 あ、いや、もういい。

小吉 へい。

うたえ ほほほ。

深草 小吉！

小吉 へい。

深草 ちよつと待て。

小吉 へい。

「ちりりん」

小吉 ……戻るか？

深草 いや…。

うたえ はあーっ(ため息)

深草 まあ、上がれ。

小吉 へい。

小吉が上ろうと廊下に足をかけた途端、「ちりりん」と鈴が鳴って、若き小町が現れる。

若き小町 何をしてるんだい？ お前！

小吉 いや…。

若き小町 その汚い足を下ろしなさい！

小吉 ……へい…。

若き小町 何様のつもりだい？ 車夫ごときがここにも上がれると思  
うんじゃないよ！

小吉 いや、旦那が…。

若き小町 まったく身の程をわきまえないのかねえこのバカは！

うたえ こまちゃんちよつと言い過ぎよ、バカだって人間なんだか  
ら、バカだって。

深草 小吉、戻ってろ！

小吉 ……本当だな…。

深草・若き小町 え？

小吉 本当なんだな。

深草 ああ、本当だ、戻っていい。

小吉、戸を閉め、戻っていく。

小町身震いする。

若き小町 深草さん、どうしてあんな者を使っているの？

深草 真面目は真面目だからな。

若き小町 そうかしら、あたしはあの男、何かたくらんでるような  
気がして…。

深草 たくらむほど知恵が回れば、ぼくの車夫なんぞやっていないよ。

若き小町 そうかしら？

深草 それとも、能ある鷹だつてのか？

うたえ 鷹かどうかわからないけど発情期の動物は怖いわよおー、凶暴だわよおー、見境ないわよおー。

深草 誰に発情してるんだい？

うたえ もちろん！

若き小町 バカなこと言わないで！ 寒気がする。

深草 そんなことぼくが許しやしないよ。小町はね、もうぼくのものになつたも同然さ、だつてあと一日なんだから。

若き小町 そうですわね、あと一日ですわね。今日が九十九夜目。

うたえ よく続いたわねえー、驚いちゃったわ。

若き小町 そうね。

深草 今夜は眠れそうにないよ。

若き小町 あたしもですわ。

うたえ あたしも寝ない方がいいかしら？

若き小町 あんたは関係ないでしょ。

うたえ ひどいわあ、あたしだつて百日頑張ってきたのに。

若き小町 九十九日！

うたえ 九十九日頑張ってきたのに。

若き小町 あんたは単に奇妙な行動取つただけでしょ、何を頑張つたつて言うの？

うたえ そりゃまあ、お茶入れたりとか、お茶菓子買ってきたりとか。笑つたりとか泣いたりとか、背中搔いたりとか足の裏の臭い嗅いだりとか。

若き小町 それにどんな意味があるの？

深草 まあまあ。

うたえ 意味？ 意味なんかないわ意味なんか。意味なんかないけど頑張ってきたのよ。

若き小町 ばかじゃないの？

深草 まあ、人間が生きてる意味なんて大してないからね、でもぼくにとつてこの九十九日は何より意味のあるものだったよ。

若き小町 どんな？

深草 それが明日になれば全てわかる、明日になればね。

若き小町 一刻も早く明日が来ることを祈ってますわ。

うたえ でも待つてる時間は、長いのよねえー。

若き小町 うるさいねえ、あっちへお行き！

うたえ やつぱりあたしお邪魔虫？

若き小町 当たり前じゃないか、しっしっ。

うたえ まあひどい、どう思います？ 深草さん！

深草 ははは。

若き小町 さあさ、行った行った……。

小町、うたえを追い出す。

うたえ ちよつと、あたしだって、ああ、深草さん！

去るうたえ。

若き小町 邪魔者は去りました。

深草 ああ、でもまあ、別に、ねえ。

若き小町 ほんとにそう？

深草 え？

若き小町 本当に今夜も帰ってしまうの？

布団に座る小町。

深草 だってあとたった一日じゃないか。

若き小町 だったらいいじゃない。

深草 約束は約束だ。

若き小町 約束なんて破るためにあるものでしょ。

深草 そういうわけにはいかない、それとも、九十九日で一生ぼく

のものになるのかい？ 小町。

若き小町 それはできませんわ。

深草 だったら……。

若き小町 何か嫌な予感がするの。

深草 嫌な予感？

若き小町 このままお別れしたら、もう二度とお会いできないよ  
な……。

深草 そんなバカなことはない。

若き小町 でも……。

深草 そんなにぼくのものになるのが嫌かい？

若き小町 そんなことはありませんわ。

深草 ……よかった。

若き小町 でも、あたし怖いの。

深草 なにが？

若き小町 このままあなたのもものになってしまふことが。

深草 何も怖がることはない、明日、夜が明けたらすぐに通つてく  
るよ、そして夜を待とう。百夜目がぼくたちの初夜だ。

若き小町 そうなったらうれしいけど。

深草 じゃあぼくは帰るよ。

若き小町 待って！

深草 大丈夫さ。

若き小町 深草さん。

深草 じゃあ、さよなら。

「ちりりん」と、小町、持っていた鈴を鳴らす。

立ち止まり、振り返る深草。

若き小町 この鈴、大事にしますわ、あなたの、九十九日目の贈り

物として……。

深草 ……ありがとう……。

深草、戸を開けて去って行く。

若き小町 ……行ってしまった……あの人、なんにもわかって

ない、なんにも……たった一度で良かったのに……一生なんて……バカげてるわ。

小町、鈴を小さな鏡台の上に置く。

うたえ そんなこと言って後悔しない？

突然現れるうたえ。

ビクツとして一瞬うたえを見つめる小町。

若き小町 ……後悔？ あたしは今まで後悔なんてしたことないんだよねえ。そしてこれからもね。

うたえ あらま自信たっぷりだねえ。あたしなんか後悔だらけだわ、あの時ああしておけば良かったこうしておけば良かった、あんなチャンスは二度とないのにもうなんであたしったらバカバカバカ、なんてことばかりよ。

若き小町 ふっ（鼻で笑う）

うたえ あーっこの女、鼻で笑った、鼻で笑ったわ、きーっくやしい！

若き小町 そんなことないわよ、ふっ。

うたえ あああああああああ、こ、後悔するわよ、絶対後悔するわよ。

若き小町 してみたいもんだねえ。ところであなたは何しに来たん



だい？

うたえ 邪魔しに来たの。

若き小町 え？

うたえ だって、あなたの自由も今夜一晩だけでしょ。だからそんなの自由にはさせじと、邪魔しに来たの、いいでしょ。

若き小町 そんなのわからないじゃないの、明日になるまでは。

うたえ だってもうそうなったも同然だわ、同然！

若き小町 うたえ・・・あんただれ？

うたえ え？

若き小町 だれ？

うたえ うたえでしょ。

若き小町 じゃ、あんたなに？

うたえ・・・人間・・・。

若き小町 ふーん・・・。

うたえ 人間でしようよ、人間。

若き小町 変な人間。

若き小町、衝立の後ろへ。

うたえ どうせあたしは奇妙な女ですよ、でも人から見れば人は多かれ少なかれ奇妙なところを持つてるものよ。

若き小町 誰も奇妙だなんて言っていないわ、変って言ったのよ。

うたえ おんなじよ、おんなじ。

若き小町 あたしもう寝るわ。

うたえ 眠れそうにないんじゃないの？

若き小町 バツカねえ、そんなことあるわけないじゃない。

うたえ そうよあんたはそういう女よ。

若き小町 わかってるじゃない。

うたえ 子どもの頃からお祭りの夜だって大晦日だって関係なく早寝できるような性格なのよ。台風の夜だって大雪の夜だってグウ

スカ寝る女なのよ。

若き小町 それは凶太いつてこと？

うたえ 無神経ってこと。

若き小町 失礼ね、さっさとあっちへ行きなさいよ。あたしもう寝るんだから。

うたえ まったくよく寝るわね羨ましい、悪い奴ほどよく眠るって言うけどほんとだわね。

若き小町 あんたの憎まれ口も今夜限りかと思うと淋しいわ。

うたえ そんなことないかもよ。

若き小町 あの人に来なかつたらね。

うたえ 来てもね。

若き小町 え？ どういうこと？

うたえ あたしもついてっちゃったりして。

若き小町 やめてよ。

うたえ でも、あたしいないと大変でしょ、いろいろ。

若き小町 なにが？

うたえ いろいろ。

若き小町 ふーん・・・別にいいよ、いてもいなくても。

うたえ じゃあ、おやすみなさい、ほっほっほっほっほ。

うたえ、去る。

若き小町 まったくなによあの女。

小町、布団に入る。

若き小町 あーあ、明日かあ・・・本当に眠れないかも知れないな。

能管の音が響く。それはこの世ならぬ調子で奏でられる。

ゆつくりと廊下の奥から登場する深草。

枕元に立ってじっと小町を見下ろしている。

すると、後見の男女が立ち上がり、小町の掛け布団を剥いでいく。

寝間着姿で寝ている若き小町。

深草 この姿を何度夢に見たことか。この薄衣を夢の中で何度剥ぎ取ったことか。指にまとわりつく幻の柔肌、冷たい血脈のたぎり、押し寄せる官能のうねりに何度目を覚ましたことか。九十九日帰る度、安堵と後悔がさざ波のようにぼくの胸を行き来する。この手が、指が、腕が、小町という名の肉のかたまりを求めていた。九十九日通う度、一時と永遠の葛藤が、ぼくという体の中でせめぎ合っていた。それももう終わりだ。永遠が一時に勝り、ぼくは勝利した。そう、勝利したはずだ。しかし、ときに勝利は全てのもを奪い去る。敗者以上の敗北者をつくり出す。

小町ゆつくりと目を開ける。

若き小町 だあれ？

深草 この世で最も哀れな勝利者だよ。

若き小町 深草さん？

深草 一時の情欲に身を任せた愚かな敗北者たちよりも、もっと哀れな負け犬だよ。

若き小町 え？

深草 遠吠えしようか、ワオーン！

若き小町 どうなさったの？

深草 哀れんでくれ、ワオーン！

若き小町 なにがあったの？

深草 ぼくは、お前の体の上を通り過ぎて行った幾多の男たちよりバカな犬だよ。

若き小町 ……知っていたの？

深草 できれば一生知らぬふりをしていたかった。

若き小町 ……いまからでも……どうぞ。

深草 はっはっは（力無く笑う）小町。

若き小町 はい？

深草 君の思い通りになったね。

若き小町 え？

深草 君はぼくのものになる気などなかったってことさ。

若き小町 ……。

深草 それは正しいのかも知れない。土台人を自分のものにするなんてこの上もなく傲慢なことだ。そんなことを無邪気に信じてたぼくがバカだってことさ。

若き小町 ……そうね……始めからそれがわかってればね。

深草 ……でもね小町、ぼくはこの九十九日、この上もなく幸せだった。

若き小町 それはようございました。

深草 お礼にぼくの邸をあげよう。春には花、秋には紅葉の美しい

邸だ。庭を眺めるだけで一生暇つぶしのできる邸だ。

若き小町 それはありがとう。

深草 あ、それから、一生解けぬ呪いをかけてあげよう。

若き小町 え！

深草 一生の後悔、一生の孤独、そして一生の退屈だ。

若き小町 はあ？

深草、ゆつくりと去ろうとする。

若き小町 ちよっと待ってよ！

深草、振り返り。

深草 ついでに教えてあげる。間もなくここに、一人の男がやって

くる。小町、君も良く知ってる男だ。そう、彼は気が狂うよ。  
若き小町 え？

深草、去る。

後見の男女、小町に布団を掛ける。  
間。

小町、起きあがる。

若き小町 夢かしら？

ガタガタと戸を開ける音がする。

小吉 がらがらがらり。

若き小町 だれ？

と言う間もなく入って来たのは小吉。

若き小町 小吉！ 誰が上がっていいって言った！

小吉 (にやりと笑い) 夜明けにはまだ早いが百日目の朝だ。

若き小町 え？

小吉 百日たっちまったよ。

若き小町 そうかい。

小吉 旦那は来ねえ！

若き小町 え？

小吉 旦那は来ねえって言ってんだ。

若き小町 バカなこと言うんじゃないよ！

小吉 俺だっけって言って言ったな！

若き小町 はあ？

小吉 百日通ったのは俺だ！

若き小町 おめでたいねえ、お前は！ まだ夜明け前だ、夜まで時

間はたっぷりあるんだよ。

小吉 いくら待っても旦那は来ねえ。

若き小町 百日送り届けるのがお前の約束じゃなかったのかい！

小吉 約束は破るためにあるものだ！

若き小町 はっはっはっは、良く覚えてたねえ。

小吉 百日通ったからお前は俺のものだ！

若き小町 お黙り！ お前ごときに指一本さわらせるもんかい！

うぬぼれるんじゃないよ！

小吉 はっはっは！

小吉、素早く小町の側に寄り、指一本で体に触れる。

小吉 ははは、指一本さわってやった。

若き小町 汚い手でさわるんじゃないよ！

小吉 旦那ならいいってのか？・・・残念だったな、もう旦那はここに来ねえ。約束は破られた。替わりに俺が来た。俺は百日通った。お前は俺のものだ。

若き小町 約束は・・・。

小吉 破るためにある。

若き小町 わかってるじゃないか・・・。

小吉 約束なんかどうでもいい、俺はお前の・・・。

襲いかかる小吉。しかし素早く身を翻す小町。

若き小町 お前、あたしを満足させられるんだろうねえ。ええ？

小吉 試してみるがいい。

若き小町 ん？

小吉 あ？

若き小町 臭い。

小吉 え？

若き小町 臭い！

小吉 え？

小吉、自分の体の臭いを嗅ぎ始める。

若き小町 生臭い・・・血の臭いだ。

小吉 へへへ、洗っても臭いは取れねえか。

若き小町 え？・・・お前、血だらけじゃないか。

小吉 え？

若き小町 どこか怪我でもしてるのかい？

小吉 そんなことはねえ。

若き小町 そんな血塗れの男に抱かれるのは嫌だよ。

小吉 そうか・・・。

若き小町 洗っておいで。

再び能管の音が響き始める。

小吉、外に出て手を洗い始める。

ジャブジャブと音がする。

若き小町 ・・・・小吉がねえ・・・ふっ・・・ふふふふ・・・あた

し、自由だわ。

小吉、手を洗い終えて再び上がり込んでくる。

若き小町 おや？ 全然落ちてないじゃないか？

小吉 なに？ ……あ、ほんとだ…。

ジャブジャブと水の音。

若き小町 ……やっちゃまったんだねえ……ほんとにバカな男だよ。

戻る小吉。

若き小町 どうしたんだい？ しっかり洗ったのかい？

小吉 え？

若き小町 それともあたしを血塗れにしたいのかい？

小吉 そんなんじゃないやねえ！

戻って三度洗う小吉。

小吉(声) くそつ、落ちろ、なぜ落ちねえ。くそお、あのやろう。

次第に水音が激しくなる。

同時に能管に鼓が加わって音楽が激しくなっていく。

戻ってくる小吉。

両腕に石鹼の泡をたっぷりとつけて、洗っている。

小吉 落ちないんだ！ なんで落ちないんだ！

若き小町 小吉…。

小吉 血が、こびりついて……取れない！

若き小町 お前、血塗れだよ、生臭いよ、取れないねえ、一生取れ

ないねえ。

小吉 なあ小町……なんで取れない……石鹼で洗っても、なんで取れない！

若き小町 お前が見るもの全てが血で汚れてしまったんだよ。

小吉 小町、取ってくれ、落としてくれ！

小吉、小町に詰め寄る。

小町はそれを避けて逃げる。

小吉 おい・・・逃げるな・・・この血はどうやったら取れる・・・  
・どうやったら取れる！

小吉、石罅まみれの手で小町につかみかかる。

若き小町 さわるんじゃないよ！

小吉 どうする？ この血どうする！ 落としてくれ！ 洗ってくれ！

若き小町 小吉、やめ・・・さわんない・・・いや・・・臭い・・・。

小吉の泡だらけの手がいつの間にか小町の首に巻かれている。

小吉 俺の手は・・・血塗れだ！ 俺の手は、血塗れだ！ お前だ

・・・お前のせいだ・・・お前さえいなけりや・・・。

若き小町 やめ・・・小吉・・・血が・・・。

小吉 小町・・・なんで・・・小町・・・血が・・・小町・・・。

若き小町 ・・・。

音楽止む。

いつの間にか、うたえがいる。

うたえ やっちやえやっちやえ。

ビクツとして手を離す小吉。

せき込む小町。

うたえ ちゃんと見てるから、ほら、やっちやえやっちやえ！ こ

んな性悪女、お前みたいなの殺されるのがお似合いだよ。

若き小町（せき込みながら） うたえ・・・。

うたえ 復讐よ、復讐あつはつは、あたしを鼻で笑った復讐よ。

小吉 いや、違うんだ、これは、血が・・・。

うたえ 違うってなにが？

小吉 違う、血が・・・。

うたえ 血だつて？ そんなものどこにもついてないじゃないか。

小吉 え？

うたえ お前、こまちゃんにたぶらかされたんだねえ、そうだろう。

小吉 血がついてるんだ、血塗れの男に抱かれるのはいやだつて言

うんだ。

うたえ こまちゃんたらほんとに見境ないわねえ、小吉でいいの？  
小吉で。

若き小町 違うって……。

うたえ 選んでるって言ってたけど全然選んでないじゃないの。

若き小町 だから違うんだって……。

うたえ そんなこと言ってるって、殺されちゃうわよ。ねえ小吉。

小吉 いや、俺は……。

うたえ 嘘つくんじゃないの！ 男なんて欲情に駆られたらそれこそ人殺してだって思いを遂げようとするんだから。ねえ小吉。

小吉 ううう……。

うたえ ……あたしはいいのよここで見てるから……。

若き小町 うたえ、あんた本気で言ってるの？

うたえ ええ、あたしはいつだって本気よ、本気じゃないとき以外は。

若き小町 あんたの冗談は面白くないのよ！！

小吉 お前、顔、赤い……。

うたえ え？

小吉 お前、顔、赤い、血が出てる。

うたえ 何言ってるんだい？

小吉 お前も、赤い。

若き小町 え？

小吉 赤い、赤い、血だらけだ、あ、あ、あそこも、ここも、血だらけだ。

若き小町・うたえ 小吉……。

小吉 畳にも血が染み込んでる。赤い……赤い。血だ……血がついてる。

小町、うたえ、顔を見合わせる。

小吉 あつちも赤い、こつちも赤い。真っ赤っ赤だ。

小吉、あつちこつちを指差して「赤い、赤い」と言っている。

小吉 なんか、みんな真っ赤だな。赤くてきれいだな。赤い。うん、赤い。

その姿を用心深く目で追う、若き小町とうたえ。

小吉は、「赤い、赤い」と言いながらゆつくりと廊下の方



へ行き、去って行く。

怯える小町、小吉の去るのを確認して戸を閉めるうたえ。

若き小町 行っちゃった・・・。

うたえ 助かったわね。

若き小町 え？ なんだって？

うたえ あたし、知ってたわ、小吉が狂うこと。

若き小町 ・・・・うたえ・・・あんた誰？

うたえ うたえでしょう。

若き小町 ひどい奴。

うたえ あたしが来なきや殺されてたわよ。

若き小町 やっちゃえやっちゃえって・・・。

うたえ 作戦よ、作戦。

若き小町 復讐の？

うたえ 何言ってるの、ほら、まだ、泡がついてる。

うたえ、小町の側に寄り、エプロンで泡を拭く。

それはまるで、どろんこ遊びをした子どもの顔を拭く母親のようである。

顔や首についた泡を拭いていると、いつの間にか、小町は泣いている。

それに気づくうたえ。

うたえ あら？

若き小町 なんでもない、なんでもないの。

うたえ どうしたの泣いたりして・・・。

若き小町 泡が目に入ったの、泡・・・。

うたえ そう・・・。

エプロンでその涙を拭くうたえ。

若き小町 ・・・・ありがとう・・・。

うたえ あら珍しい。

若き小町 ・・・・あと一日だったのに・・・。

うたえ それがお望みだったんじゃないの？

若き小町 そうねえ・・・そうだったわね。

うたえ 後悔してるの？

若き小町 ・・・・もう、深草さんには会えないんだわ。

うたえ まだ百日目の朝も来てないわよ。

若き小町 あたしとあの人の百日目の朝は永遠に来ないのよ。

うたえ それはわからないじゃないの。

若き小町 あの人、きつと殺されてしまった・・・あたしのせいだ。

うたえ・・・好きだったの？

若き小町 わからない・・・わからないの・・・。

うたえ・・・そうねえ・・・。

若き小町 あんな人初めて、あんな・・・。

うたえ もう、寝たら？

若き小町 うん・・・。

うたえ じゃあ、おやすみなさい。

若き小町 待って！

うたえ え？

若き小町 あたしが眠るまでここにいて。

うたえ 珍しいわねえ。

若き小町 なんか、そういう気分なの。

うたえ 怖いのか？

若き小町 ううん、でも、なんか・・・。

うたえ・・・わかったわ、あなたが眠るまでここにいてあげる。

あなたにそれが安心するのなら・・・。

若き小町 ありがとう・・・。

小町、布団に横になる。

枕元に座り、それを見守るうたえ。

静かに子守歌を口ずさみ始める。

うたえ ♪さあ 眠れや もう

あまり泣くと ほら

暗いところから

やって来るよ いま

恐ろしい あの

化け物たちが

さあ 眠れや もう

屋根の裏に 来た

お前の涙が すぐ

止まらないなら きつと

生きたままの ああ

魂のかけらと

頭うで足まで

食べられてしまう

眠れ静かに

さあ 眠れや もう♪

次第に小町の寝顔が穏やかになっていく。

うたえ ……寝た？ 眠った？ ……こうして眠ってる顔は穏やかなのにねえ。

外から戸を叩く音がする。

先生 こんにちは。

素早く立ち上がり、戸の側まで行くうたえ。

うたえ ……どなた？

先生 ぼくです。

うたえ 先生？

先生 ええ、まあ。

うたえ、静かに戸を開け、口元に人差し指をあてる。

先生 ……何か？

うたえ こまちゃん、寝てるから。

先生 ああそうですか……こんばんわ……。

うたえ ……え？ ああ、もう、そんな時分ですか……どうぞ……。

先生 では……。

と、上がる。

先生の腕には、白百合の花束が抱かれている。

うたえ あら？

先生 百日目のプレゼントですよ。

うたえ とうとう百日目ですか。

先生 そうです。

うたえ 百日通ったら死ぬって……。

先生 そんなの信じちゃいないよ。だって、ほら、びんぴんしてる。うたえ やだ先生ったら、びんぴんだなんて。

先生 何言ってるんですか、びんぴんじゃないですよ。

うたえ きゃーやだ先生ったら！

先生 しーっ。

うたえ そうよね内緒よね。

先生 いやそうじゃなくて・・・。  
うたえ そうじゃなくてなに？

先生、寝ている小町を指差す。

うたえ あらそうだわ、そうなのよね。

若き小町 まったくうるさい女だねえ、夢見が悪くなるじゃないか。  
うたえ あら起きちゃった。

若き小町 あら起きちゃったじゃないよ、あんたの声はあたしを起  
こそうとしてるじゃないか。

うたえ ほほほ。

先生 こんばんわ。

若き小町 ・・・・深草さん？

先生 え？

うたえ 先生でしょ、先生。

若き小町 ああ、そう、そうだわね、もう、そんな時間なの？  
うたえ ええ、そうよ、こまちちゃんよく寝てたわ、あたしも目を

覚まさないんじゃないかと思つてわくわくしてたの。

先生 わくわくつて・・・。

うたえ いえ、むらむら。

若き小町 あんたバカだね。

先生、小町の枕元に座る。

先生 はい、これ、百日目のプレゼント。

と、白百合の花束を渡す。

先生 百日会うつてことで、百合にしたよ。白百合で、九十九、百、  
会う。

若き小町 ありがとう。

うたえ まあ、小洒落てるわね。

若き小町 でも先生、覚えてらっしゃる？ 百日通つたら・・・。

先生 大丈夫。ほら、ぴんぴんしてるよ。

うたえ きゃー、やだ先生。

若き小町 ・・・・そうね・・・。

先生 さあ今日は、お茶とか飲まずに仕事するぞお。まず、うつぶ  
せになつて・・・。

若き小町 あ、はい・・・。

うつぶせになった小町の背中をマッサージし始める先生。

先生 ん？ あれ？ ちょっと冷えたかな？ 冷たいよ。

若き小町 先生。

先生 はい？

若き小町 先生、あたし夢を見たわ、ずっとずっと昔の夢。

先生 はいはい。

若き小町 先生は、深草さんだった……。

先生 え？ あ、そうですか。

若き小町 あたし、本当は待ってたのよ、深草さんのこと。毎日毎日。でもどうして？ 何が怖かったのかしら？ バカげてるのよ、

そんなことは……ほんとかしら？ あんな誠実でバカ正直な人

……なんでそんな人にあんな仕打ちをしてしまったのかしら？

後悔？ そんなものあたしには無縁だと思ってた。深草さん？

あなたがいたらあたし、こんなに長生きしてなかった。半分死

んでから、もう半分死ぬまでにこんなに夜を数えなかった。でも、

帰ってきてくれたのね……。

うたえ（小町の長ゼリフの間に） 先生、上着……。

先生 ああ。

と、先生、上着を脱いで、うたえに渡す。

その間も小町のセリフは続くが、若き小町は立ち上がり廊

下へ、入れ替わりに老婆が登場する。

若き小町と老婆がすれ違うその刹那。

若き小町・老婆 あたし、罪を償ったわ。

若き小町、廊下の向こうへゆつくりと去って行く。老婆は若き小町の言葉を引き継ぎ、ゆつくりと布団に坐る。

老婆 今まで一時だって深草さん、あなたを忘れなかった。それももうおしまい。だって、帰ってきて下さったんだもの。嬉しいわ、あたし嬉しい。ずっと一人だったの、ずっと。あなたにかけられた呪い。あたし守ったの、それを。ずっとずっと呪われてたの。九十九日の思い出だけであたし、今まで生きてきたわ。何十年も……。人は、思い出だけで生きていけるのね。あたしそれを実証したわ。一生かけて……。

先生 さあ、横になって……。

老婆 先生、白百合ってね……。

先生 はい。

老婆 西洋では、死者に手向ける花よ。  
先生 え？  
老婆 そう。  
先生 そうだったんですか？ 知らなかったなあ。  
老婆 いいの、だってそうなんですもの。  
先生 え？  
老婆 言ったでしょ、百日通ったら死にますよって……。  
先生 ええ……。  
老婆 うたえ。  
うたえ はい？  
老婆 ……あとはよろしく頼むわね。  
うたえ はい。  
先生 え？ なに？ ちょっと……。  
老婆 先生？ あたしの体、支えて下さる？  
先生 え？ あ、はい。

先生、恐る恐る老婆の体を支える。

老婆 ああ、これで楽になった……。  
先生 でもこれじゃあ……。  
老婆 いいの、先生……もうじき、あたし、死ぬわ……。  
先生 え？  
老婆 言ったでしょ、百日通ったら死ぬって……。  
先生 いや、それは……。  
老婆 死ぬのはあたし……もう……許して……ね、深草さん……。  
先生 ……小町……。  
老婆 ありがと、センス……あたし、一度でいいから、深草さん  
に……抱いて欲しかった……一度だけで良かったの……こ  
れ、抱かれてるって言ってもいいわね……。  
先生 ……ええ……。  
老婆 嬉しい……。  
先生 ……ほんとに、死んじゃうの？  
老婆 本当よ……。  
うたえ 良かったわね、先生……。  
先生 ばっ！  
老婆 ……この邸……深草さん、あなたにお返しするわ。  
先生 え？  
老婆 あなたに、お返しするわ……。  
先生 いやあ……。

老婆 先生、受け取って……。  
先生 いや、あの……。  
老婆 お返ししたいの……。  
先生 いや……。  
老婆 ねえ……。  
先生 ……はい……。  
うたえ 良かったわねえー。  
老婆 もうダメ……。うたえ……。奥へ……。あたし……。見られ  
たくないわ……。死ぬところなんて……。  
うたえ はいはい……。最後までわがままなんだから……。  
うたえ、老婆の側に寄り、先生の手を離し、老婆を立たせ  
る。

うたえ 行くわよ……。

少しふらふらしながらも、自らの足でゆっくりと歩いてい  
く。  
うたえが先に立ち、ゆっくりと廊下を去って行く。

先生 ……あの……。

老婆、振り返る。

老婆 深草さん……。ありがとう……。先生……。さよならだわ。  
先生 ……固定資産税は、高いわよ……。  
先生 はい……。さよなら……。

先生、呆然と見送った。

しばらくぼーっとして見送っていたが、ふと、白百合の花  
束に目を落とす。

そして、ごろんと布団に横になる。

先生 はあーっ。(ため息)……。ふふっ……。ははははは……。  
まあ……。いいや……。

後見の男女出てきて、先生の寝ている布団を引っ張り、先  
生を畳に投げ出す。

先生 いてっ……。なんだよ！

掛け布団と敷き布団を持って去る後見の男女。

先生は部屋を見回し、衝立の後ろに回る。

そして浴衣を見つけて広げてみる。

しげしげと見た後、羽織ってみる。

先生 どう？ 似合うかしら？

そして、部屋の隅の小さな鏡台の上に置いてある面を見つ  
ける。

先生 お？ ふーん……。

そして面を付けてみる先生。

先生 あたし、きれい？

さらに鏡台の上の鈴を手を取った。

すると、急激に腰を折り、老女の格好になってゆく先生。

からからと戸が開き、小吉が入ってくる。

小吉 からからからから。

小吉は白百合の花束を見つける。

小吉 花咲いてるところはお墓だ。

小吉、白百合の花束から、花を一本一本外し、部屋の至る  
所に飾っていく。

小吉 赤い、赤いな。うん。

小吉は「赤い、赤い」と言いながら白百合を飾り、老女に  
なった先生は、両手を振り上げ、そして振り返り、老女の  
型を舞う。

「ちりりん」と響く鈴の音。

飾り終えた小吉は、ややゆっくり廊下を奥へと去る。

老女を舞う先生は、腰を折ったまま、ゆっくり、ゆっくり



と廊下の奥へと去る。

「ちりりん」「ちりりん」と鈴の音が次第に小さくなっていく。

部屋のあちこちに挿された白百合は、まるで何かを吊っているかのようだ。

残る静寂。

全ての明かりが落ちていく。

— 了 —